

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第194号（2022年7月）

常世の風に吹かれて呟いて（2） 白井啓治

（白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を）

抜粋して連載します。）

『トマトの紅色の数が増えて夏のやって来るぞ
と言う』
（2012年7月8日）

雨があたり日が差すとトマトの紅色が急に増え始める。そして、トマトの木の間から数蚊が一斉に飛び出してくる。お犬様は蚊の群れの中を平気で歩いている。それもそのはず吾がお犬様は竹藪育ちであつた所為か毛が特に密集しているの、蚊がなんぞに簡単に食われることはない。証拠に、昨年我が家に来た時にフィリアの検査をして陽性だったのであるが薬を投与して今年は陰性。もともとフィリアの陽性も軽いものだったようだ。トマトの木の下でお犬様を見ていたら、密集した毛に挟まれてもがいている蚊が数匹いた。私が襲われていたら大変なことであつた。もがいていた蚊をシンパシンと叩き潰していたら、お犬様は怪訝な顔をしていた。

未だ色づき始めだからトマトの収穫も一日5、6個。朝の野菜にはちょうどいい数である。ただまだ暑さが足りない所為なのと土中の水分が多いために甘さが足りない。酸味はもとも少ないトマトなので何となく寝ぼけ味のトマトである。朝食にトマトを摘まんでいると、お犬様欲しそう

に尻尾を振るので半分にして鼻先に持つていくと足顔をそむけて「それはいらぬ」という。お犬様は傍で見ていて「お前、人の食べるものをいちいち欲しがるんじゃない」と説教でもしている顔をしている。そう言えばお犬様は、隙を見てはお猫様のフードをつまみ食いをしている。そのうちお犬様に鼻先をパンチされるからな。

本日も風に吹かれて一人と二匹の三人は平安。



（絵： 兼平智恵子）

『蒸し暑さの中ダンゴ虫わんさかわんさか湧いて出る』

（2012年7月13日）

椿、躑躅の枯葉をかき集めると、ダンゴ虫がわんさかわんさか這い出してきた。農薬だと除草剤、殺虫剤などを撒かないのもだからダンゴ虫の奴、我が世の春とばかりに繁殖をしている。植木の下を時々綺麗に掃いて枯葉を一カ所に集めて穴に埋めているのであるが、その中にわんさか繁殖するらしい。ミミズだとか色々な幼虫が住んでおり、モグラがやって来て餌場になっているが、ダンゴ虫は喰ってくれない。ダンゴ虫には毒があり小

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市府府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

鳥もついでにばんでくれないらしい。天敵がいらないものだから増え放題である。そう言えば今日雑草を抜いていたガマガエルの子供が数匹草叢から出てきた。庭の塀の傍の躑躅の根元には個々の主のような顔をしたガマガエルが住んでいる。越してきたときから居るが、まさか同じ蝦蟇ではないだろうから毎年子供が孵っているのだろう。夏になると青大将も出てくる。ブロック塀の上に脱皮したものが長々と捨て置かれていたりする。時々お犬様が庭を掘りながらウオンウオンと吠えているが、恐らくガマだとかヘビだとかが居るのである。最近空気がすっかりなくなってきたので雉の鳴き声を聞かないが、少し前にはケンケンというけたたましい声が聞こえていたものがある。お犬様の土堀遊びが終わり、ブラッシングをしてあげていたらダニが二匹毛の中から出てきた。そろそろ二週間になるからシャンプーをしてあげなければ。

茅葺き民家 大場ぶどう園様を訪ねて

兼平智恵子

今年五月に石岡市内六年生の、常陸風土記の丘公園内見学があり、ガイドとして古代家屋復元広場を担当しました。

その折に江戸時代後期の建物で、「茅葺き屋根のお家はどの位のお金がかかったのですか」の質問でした。果たして江戸時代その当時の金額を調べるか……難題でした。

早速、茨城の茅葺き屋根の民家で検索。

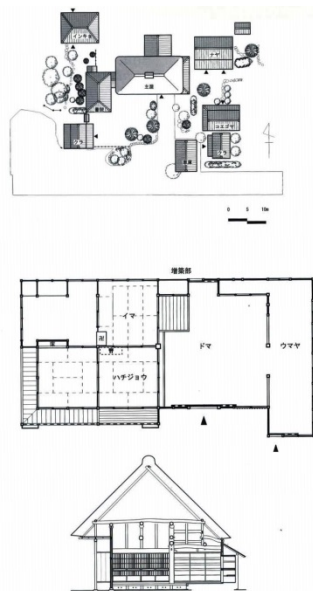
茨城は「関東の茅葺きの王国」といわれ、その中でも石岡八郷地域は現在七十棟残っており生活住居として大事に使われているという事でした。

平成十九年度発行の「筑波山麓 茅葺き民家」によりますと、八郷地域の茅葺き屋根が残っているエリアは筑波山麓の農村エリアで、温暖な気候に恵まれた筑波山麓では江戸東京という大消費地に近いという立地にも恵まれ、食料基地として稲作の他に、麦や大豆の二毛作が盛んに行われ、豊かな農業経営に支えられた長く安定した暮らしが営まれてきました。現在に残る大きく立派な茅葺き民家は、この地域の豊かな農業の象徴といえるでしょう。

安定した農業経営に支えられて、農家に暮らしを楽しむゆとりが生まれると近隣の付き合いや接客の場が、庭と一帯となった書院座敷として整備され、この書院座敷が母屋とは別棟の離れとして整備されているところも、この地域の農家のつくりの特徴となっている。このようにこの地域の茅葺き民家は、農業を営む生活に加えて、田園生活

を楽しむ心にこたえて、庭園と一体となって美しく飾られた茅葺きの風景がもうひとつの魅力となっているという事です。

この美しく飾られた数々の茅葺き民家の中で、平成十七年国登録有形文化財に指定されたぶどう園を経営なさっておられる大場様宅に伺ってきました。



主屋の右手前に車庫、クラ、コエゴヤ、ナヤ、などの付属小屋が建ち、主屋から前庭に面して書院とクラ、さらに奥にインキョが配置されている。主屋は間口八間、奥行四・五間の整形四間取りで、改造も少なく幕末から明治前半期の民家のかたちを今に伝えている。トオシモノ四本の軒付け、ぐしには、シュロでちよんまげあるいは大名ぐしと呼ばれる装飾が施され、西側にはたこどめと呼ばれるキリトビに寿の文字、東側は竹の小口によって松竹梅の見事な装飾が施されている。

ドマの上部の煙出しには、スギ葉の装飾が施されており、随所に筑波流茅手の洗練された技を見ることが出来ます。

お伺いした時にはドマが応接室となっております。天井を見上げると、なだらかに曲がった太い松の木（曲がっている松は長持ちするとの事です）の梁

が数本、そして太い柱の数々は、いずれも江戸時代末期に建てられたころには「屋敷林」といって防風林としての役割も果たしていた、屋敷の回りにあった松や杉の木が使用されたと言う事でした。次の写真は、令和元年に表側の屋根の葺き替え（後側の屋根の部分はやらなかった）を行ったところで、はしごも見えます、上部から葺いていくこともわかります。東側の松竹梅のキリトビは最後に茅手の頭領が行い葺き替え完了となるそうです。



棟の修理中の茅葺き民家
(佐久 国登録文化財
大場ぶどう園)

葺き替えは天候が安定し、農閑期の十二月から翌年三月頃までに行なわれ、茅手さん四五人、近所の皆さんのお手伝いで十五日間位で出来上がるそうです。令和元年の葺き替え費用は約百五十万円だったそうです。小学六年生にも伝えました。

尚キリトビの「松竹梅」、「寿」の文字は家の繁栄を願うために、「水」や「龍」の文字は火災から家を守るという意味があるそうです。

大場様には農作業のお忙しいところをご丁寧にご説明頂きまして有難うございました。

ぶどう作りと共に茅葺き屋根と原風景を守っていききたいと大場様の強い意志と笑顔が心に残りました。

た。

七月末からの収穫ときには、東京からの孫たちを連れて伺います。ご愛読頂いている皆さんの為にも大場どう園さんへの道順です。

八郷支所を左にして後方を走り過ぎると最初の信号のある十字路を真っすぐに進み、間もなく丁字路を右折、ゆるいカーブ一分位走ると右側、民家の間に佐久の大杉、佐自塚古墳の看板があります。そこを右折し、まもなく恋瀬川にかかる橋を渡り、ゆるやかな上り坂を一分位、上がった所に大場どう園さんの看板があります。到着です。

○年季の冷房力尽きて 扇風機必し

智恵子

我が人生の回想6

木下明男

少年期（小学生時代）・・・？

昭和25年(1950年)、台東区立田中小学校へ入学。まだまだ、戦争の傷跡が癒えてない中での登校。一クラス45名前後で4クラス、約180名が同級生。教師も30名近くいて、約半数が女性だった。入学直後くらいか、クラス全員がDDTの消費をされた、進駐軍の命令とか・・・？そして給食、全員がアルミ製の食器、コップ、パンにトロミのあるもやし多めの野菜汁、大きめの椀に並々と注がれた脱脂粉乳(アメリカのガリオワ・エロワ資金援助)。とても美味しいとは言えないが、空きっ腹のお腹には貯まったようだ？私は好き嫌いが多めだったので、給食には難儀し器ごと家まで持ち帰

ることも多かった。食糧事情は、配給制度が残っており、主食は米穀通帳での配給、うどんや牛乳等は切符での量制限。足りない食料は、闇屋から流通料金より高めで購入、多くの家庭では闇で食料や物資等を賄っていた。米穀通帳は全家庭に公布され身分証明にもなった。

遊びは前回にも書いたように、ガキ大将を中心に近所の子供たちの多くがつるんで遊びまわるのが常であった。小学校の年長になるにつけ、塾等に通う家庭も始める？因みに私は、5年生からそろばん塾に通い始め、6年生で日本商工会議所認定の3級を獲得。また鉱石ラジオや真空管ラジオの組み立てがブームに、此の頃は出来合いではなく、設計図を基に組み立てた。抵抗などはハンダコテにて接着、コイルは線を巻いて(蜘蛛の巣コイル)自作。其のための材料を、秋葉原まで歩いて(2時間位掛った)購入しに行った。此のころ、紅梅キヤラメルのおマケにつく薄いカード(野球選手)を、掌の空気圧を利用して裏返しにして勝敗を競う「ポン」と言う遊びが流行り、カードを集め景品と交換した。常磐線で二つ目の綾瀬駅(この時期は千代田線はなかった)にある小川へ、ザリガニ取りに行ったのが冒険だった。禁止されていた遊びは特に興味深々・・・鉛筆や万年筆のキャップ(此の頃はアルミ製)に、セルロイドや花火の火薬を詰め、火をつけるロケット遊びは面白かった。

交通事情は、まだまだ車が普及しておらず、都電(南千住―新橋)やトロリーバス等(池袋方面)が主流。裏の明治通りには、進駐軍の戦車が轟音を挙げて行進していたり、馬車が通っていたり・・・？明治通り(大通りと言われていた)に

は、蕎麦屋がサバ節(数回出汁を出す)を干していたり、子供たちがベーゴマを研いでいたり、暢気さだった。買って貰えなかったが、自転車を買えたのも小学生入学前だった。大通り(明治通り)を渡り、南千住方面で月一回開催される縁日(南千住回向院)に行くのも子供にとっては冒険だった。縁日の出店は、カーバイトを水につけ発生するアセチレンガスに火を付け灯りとしていた。此の火で作った、カルメ焼きは美味しかった。定番の綿あめ、金魚すくい・・・色々楽しかった。近くに映画館もあり、時々連れて行って貰う・・・定番は、アラカン(嵐勘十郎)の鞍馬天狗。芝居小屋等もあったが、残念ながら一回も見に行っただけが無かった。

戦後間もないこの時期は、全般的な住居不足。彼方此方にバラックが合り、やと借りる事が出来たアパートの6畳一間に、5・6人の親子兄弟が暮らすのも普通にあった。我が家は小さくても二階家だったので、父の弟一家(親子4人)が数年同居、都営アパートが当たり引越していった。また、母の姉親子がその後同居、その叔母さんを訪ねてくる爺さん。従弟は爺ちゃんと言っていたが、叔母さんが生活の世話になっていた様だった。こんなこともよくある話・・・各家庭に水道はなく(共同水道)当然風呂もなく、トイレは汲み取り・・・このような生活が、猛烈な勢いで改善されていった。まずは、水道の普及とトイレの水洗化、そしてガスの普及とともに自家風呂。そしてテレビが各家庭に普及され、間もなくカラーテレビに変わっていくのも速かった。

生活環境は、吉原が近くにあり赤線の廃止(売春防止法)が昭和32年、現場での「寄ってらっし

やい“”見てらっしやい“を目の当たりに見ている子供たち、分け解らずに遊びにしていた。小学校の卒業年には修学旅行（日光が定番）が、初めての外泊（2泊3日）友人たちと枕投げ、お風呂では股間の見比べ益せた子は真っ黒に・・・？5・6年になると、低学年の指導のため週番制度があり、生活指導を行う。またクラスのため成績上位者が成る）等もあった。幸いに何回か経験をした事もあった。学校教育として、歌舞伎見物や相撲見学等もあった。子供たちの家庭での手伝いは、小さい時は水汲みや飯炊き・・・。大きくなつては、買い物や親父の仕事（果実行商）の手伝い。（リヤカー押し）担任の先生からは定番の励まし・・・「やれば出来る・・・？」親からは叱咤激励が・・・こんな日々の暮らしが、飢えや苦勞を感じさせなかった、親たちは偉かった！此の頃の小学校の校歌（歌詞）が素晴らしかった。富士と筑波を南北に 鎮護（しずめ）の山と仰ぎつつ 武蔵の原の小懇田（おわりだ）に いしずえ固く聳え立つ われらの学びや田中学校

ゝみのりの稲は見えねども 世のため身をば惜しみなく いそしむ人の真心は
われらの町の誇りにて これこそ無形の国の富
ゝ汗と愛もて怠らず 耕す者に幸ありし 土の力をしのびつゝ
大和心の二葉をば 正しく強くぞつちかわん
そして、また、運動会用の応援歌迄あった
白組応援歌

「雲を見下ろし 朝日に映ゆる 墨田の川は我等の域だ サッサ走れよ 大地を蹴って」
紅組応援歌

「今日だ 我等は腕と脚 捻子鍛えたる此の庭に力の限り示す日だ」
棒倒しの行進歌

「時事勤勉の沙汰しをば 豪気く打つの虹退治田中の終わりに」
小学生時代の記憶から」



地域に眠る埋もれた歴史（82） 木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】（8）

無量寿寺（鉾田市）

鉾田市鳥栖の「無量寿寺」（本願寺派）を紹介します。（現地近くには、もう一つ下富田にも無量寿寺（大谷派）があります）

このお寺は親鸞聖人の足跡を印す貴重なお寺ですが、残念ながら本堂などは昨年1月の火災でその姿を消してしまいました。国の重要文化財の『紙本著色拾遺古徳伝（しほんちやくしよくしゅういことくでん）』は何とか難を逃れたといえます。この記事は火災の数年前に訪れた記事ですので表現が適切で無い点がありますことご了解ください。親鸞聖人は、稲田（笠間市）の草庵から、何度と

なく石岡の地を経由して鹿島神宮に通ったと伝わっています。実はこの寺（無量寿寺）には「幽霊図」があることで有名です。親鸞の関東での弟子二十四輩の第三番順信房が開基した寺です。

幽霊の話はこうです。

「領主村田刑部少輔平高時の妻が難産で亡くなつてしまいましたが、我が子愛しさのため幽霊となつて寺に姿をあらわしたため、寺の住職もいたたまれずに逃げ出してしまい、無住の寺になってしまいました。」

困った村人が親鸞上人にお願いしたところ、聖人は村人が集めた小石にお経を1文字ずつ書いて、妻の塚に埋めたと幽霊はあらわれなくなったという。親鸞はこの寺に三年逗留し布教につとめたといわれています。」

しかし、一時は実在の人物ではないとまで疑われるほど謎の多い親鸞については、正直わからないことが多いのも確かです。

石岡では大覚寺に伝わる山伏弁円との話や、高浜の爪書き阿弥陀の話があり、親鸞聖人は高浜から舟で鹿島へ行っていたとなつていますが、小美玉市に伝わる「喜八阿弥陀堂」の話はこの無量寿寺の話と同じような話です。

いったいどのような道を通って鹿島に行っていたのでしょうか？

高浜から舟に乗ることもあったでしょう。また霞

ヶ浦北側を歩いたこともあったようです。親鸞はこの幽霊を退治するために3年間も逗留したのでしょうか。



本堂です（火災前の写真）

寺の本堂は立派ですね。この本堂は1600年代後半の築造だそうです。丁度菊祭りでは花が飾られていました。鐘楼の置かれている舎も茅葺屋根でした。

これも焼けてしまったのでしょうか。



親鸞聖人像です。

訪れたときは、昼少し前でしたが、鐘を住職の方が突いておられました。本堂、鐘楼、山門が県指定文化財でした。また境内にある聖人が植えたといわれる菩提樹が県の天然文化財だそうです。境内で写真を撮りながら歩いていると、高校生く

らしいの5、6人くらいが現れ、「こんにちは」と声をかけて行きました。みなさん椅姿で、お寺で修行していたのでしょうか。

新しくできた鉄筋コンクリートの本堂？に入っていました。寺の入口には「11月11日、12日 報恩講（法要）」と書かれていました。

この「報恩講」は浄土真宗ではもっとも大事な行事だといいます。親鸞の教えを報恩するために行なわれる法要で、信者の方が親鸞の教えを授かる日です。

私が行った日は「11月12日（土）」です。

さて、この無量寿寺のすぐ隣に、境界がない地続きの場所にもう一つお寺があります。

「教円寺」と書いてあります。

同じ浄土真宗のお寺で、今はこの前の通りの反対側の丘の上に新しい「教円寺」が建てられているそうです。

そこらには寄りませんでしたので、この旧教円寺は使われていないのかもしれない。

まわりの生け垣などは手入れされてそれなりに趣のあるお寺でした。

顔だち・表情

伊東弓子

朝、洗面所の前に立ち顔を洗うときつぱり、北東向きの窓から非がさして（陽がささない日でも）満更でもない私がいる。出かける時は南東向きの玄関から出るが、左の壁の鏡をチラッと見る。ち

よつと朝とは違う表情だ。と感じたりする。光のせいかな、これから向かう先への思いが表情に出るか、まだまだ元気にあふれていると感じたり、安物の鏡だから写りが悪いと咎めたりして家を出る。以前は鏡など見る気もせず過ごしていた。今何で、自分に問いたいのか。

六月の初め「まちかどセンター」で、一年に一度の“ふるさと風の会”の展示が開かれた。先ず目を引いたのは、五百面相の集団に囲まれて、コロナの菌がうち拉かれている状況が表現されていた。兼平さんが今までに日々作り上げてきた沢山の人間の表情ががちり菌を押さえ込んでいる。「うわーっ、すごい」思わず声をあげた。

一つの表情が菌を睨んでいた。そこで自分の表情のことに思いをはせた。怒る時は、悲しむ時は、喜ぶ時はと、自分には見えないその時々表情を思い浮かべた。私の一つ一つの表情も相手はしっかりと感じとっている筈だ。と、私も相手をとおしてその一瞬一瞬、一つ一つが自分の判断のもととなり、喜んだり、悲しんだり、有頂天になったり、落ち込んだり、誤解したりしているのだろう。そういう日々の積み重ねが生きていく土台になっているのだろうか。彼女の作り上げた五百面相の表情が私を奮い立たせる。「年老いたなど甘えているなよ」と、言っているようだ。表情豊かにいこう。

表情を豊かにしても形はよくならないと、友は言う。顔だちがいいのいいねえ。見栄えするよ。まず印象がよいからね。不細工な顔だちは損をすることが多い。まず感じが悪い。表情のない感じがする。そうばかりは言えない。美しい人でも冷たい人があるよ。どうしてこの年になって顔の話になるのか、とお喋りの仲間が思わず笑い始め、

そりやそうよ、女だもん、気になるわ。「ぶす」と、言われて悲しんでいた友がいた。その友と、しみじみ話したことがあった。

「なんで顔のことが目につくんだろうね。手や足、背が高い、低い、体が大きい、小さい、いろいろあるのね。何よりも親（先祖）から貰った生命が一番大切、有難いことで大切にしていこうよ。と分りきったようなことを言ってしまったが、慰めにもならなかったろうか。その後、よい言葉を思いついた。

「顔って人間一人一人の看板だよ。単版もつけた当時は真新しいけど、だんだん色褪せて剥けてはがれてくるよね。そしたら塗りなおそうよ。投げかけられたいやな言葉は苦しさ、悔しさは汗や目くそ、鼻くそ、耳くそ、涙、よだれ、みんな排便にしよう。あんたの新しい看板を（表情）をつくろう。私もそうする。それには自分で自分の良いところを捜すことにしていこう。それと私もあんたの良いところに気付くようにする。そしたら口に出そう、言葉にして聞いたり聞かせたりしようねと、別れたが、何故か会うのが楽しみになった。気のせいかなその友も話が多くなった。一人ぼっちから脱げ出すようにしていく人とのつながりをつくりあげていく努力が相手を、自分を豊かにすることのようだ。と、この友を通して分った。

六月は催しが続いて人と会うことが多かった。「まちかどセンター」での玉里文化協会祭「玉里照光寺」での妹 八十路を祝つての日本画展、どこにも首を突っ込んでいた私にご苦労さまと言つてやった。お蔭で多くの人に会い、今までのお付き合ひにお礼が出来、これからも生きていく力を頂くことが出来た。長い付き合いの人達とは、会

った瞬間から言葉より先に、明るい表情が伝わり、会話が続き、帰りも感想、感動を伝えてくださったりお互いに久しぶりの交流も別れ難い程だったから催しも大きな役目を果たすことになる。

一方、特に若い世代の人は、視線は行く先を見つめているから、スピードもでる。そこに婆さんの姿など目に入らない。そこには言葉も挨拶などさらさら必要ない。スピードもゆるめない。出入りのカーブも勢いがついたまま表情も変わらないまま帰っていく。ドラエモンなら「これでいいのだ」と、言うかもしれないが、私には一寸淋しい。これからどう付き合っていくといいのだろう。

先日娘の所へ行く途中、車の中でひ孫と話していた。ひ孫（小学一年）のリードで私が答える形での会話だ。日常生活にまつわる話題が中心だった。暫く話した揚句、「へえ、へえ、ひい婆ちゃん」と言いながら「はい、ここに居るのは誰でしょう」と、見せてくれた。何と、朝見る二つの鏡の中の私とは似ても似つかぬ婆さんが、低い声で何やら喋っている。「え、これ私」がっかりした。でもこれが私の現実、顔だちはともかく意地悪そうでもない。とげとげしていそうもないと見たが、ゆっくりみる気もせず、「隠して、隠して」と言つてしまった。田舎の婆さんと思わざるを得ない人がいた。これは八十代に入った私の顔と認めざるを得ない。

私って可愛い、美しいなんていわれたことはあったかな。一才の頃やつと歩き出した頃、勿論可愛かったよ、と母は言っていた。がその可愛い中に一寸いごい雰囲気をもっていたので「じゃがいも娘」とよんでいたようだ。小学校の頃は、よくリボンをつけていた。何でか？ リボン好きだったの

のだろうか。中学校の頃、色が白くなりたいと思つて、どくだみを煎じてよく飲んだが長く続けず途中でやめたのを覚えている。それよりも顔が大きい、おでこが出ている、鼻が低い、頬骨が高い、などの悩みを母に話したことがあった。母は優しく話してくれた。「ゆみちゃんが私のお腹の中にいた十ヶ月（胎児）間に長い長い先祖からいただいた生命が出来上がって産まれてきたのよ。いただいた生命は有難く大事にしてね。ゆみちゃんの目はとってもきれい、輝いているのよ。顔形より正しい心、美しい心、やさしい心を持つていると顔の表情が美しくなるよ。三十才の頃には自分が作っていく顔になるのだからね。と話してくれた。美しい心、正しい心、やさしい心をモットーに励んだ若い日々だった。結婚して夫と楽しい会話おの中、私は縄文人、顔広平たく、鼻低く、足は巾広く、短足、ズン胴、貴方は弥生人、顔細く、鼻高く、賢い人、なんて忙しい生活の中でも、形にはこだわらず化粧しないことも咎めなかった。一寸高価なクリームをくれたことがあった。なつかしい。

年が大きなにつれ、化粧はしてきた方がよかったのかと思う時がある。でも否定する。してこなかったのだから。男の人は仕事をしてきた顔、体のまま最後を迎える事が多い。女の人は化粧して着飾つて美しさを満喫するかのようになつていく。勿論男の人にも女の人にも例外はあるけど、最期は化粧することなく、何ももたずに生きてきた俣の姿でいきたいと思う。と言うのも最近は大変なる人も厚化粧をしているのを何人も見た。特にある女の人（尊敬した人）の顔がとても恐ろしかったのだ。顔だちも美しい方だったけど、何であ

んな恐ろしい顔だったのか、今尚忘れられない苦しかったのか、この世への未練があったのか、お気の毒だった。

人は最後の日をむかえることを確り意識して日々を生きていくことだと、多くの人が教わった。

顔だちも大切に、表情はより大切にしている。心の底から湧いて出てくる表情を育てていく。

雨引観音

小林幸枝

先日アジサイで有名な雨引観音（桜川市）へ行ってきました。

雨引山樂法寺（あまびきさんらくほうじ）は雨引観音（あまびきさんのん）とも呼ばれ、中国から帰化した法輪独守居士が587年に開山したと伝えられる古刹です。また聖武天皇、光明皇后の帰依が厚く、その後、弘法大師によつて真言宗の道場となりました。現在は安産子育ての霊場として広く知られる関東屈指のお寺です。

アジサイを見に行ったのですが、突然、雨引観音の境内にマダラ鬼神が登場しました。

そしてこのマダラ鬼神の写真を撮ろうと行列ができ、私達もマダラ鬼神と一緒に記念撮影しました。

雨引観音に問い合わせると、マダラ鬼神祭は、毎年4月第2日曜日に雨引観音（雨引山樂法寺）で開催されるのですが、新型コロナウイルスの影響で2020年は開催が中止となり、今年は2年

ぶりに開催され、4月23日から6月26日(日)の土日、祝にも一部臨時で開催されたのです。この祭りは、京都の広隆寺に伝わる鬼の祭とともに、日本二大鬼祭と呼ばれているようです。



私たちの目的はあじさいを見ることがだったのですが、偶然、このマダラ鬼神にも会えて本当に良かったし、とても楽しい思い出ができました。

私は今まで、マダラ鬼神祭を知らなかったのです。

この雨引観音の境内には放し飼いのクジヤクが自由に歩きまわっており、美しい羽を大きく広げて観光客を喜ばせていました。

また、猛暑の中、アヒル達は、川の中を歩いて涼しそうでした。

風と共に

《理》(25)

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「洗脳」

梅雨も終わりに近づきぐつと暑さが増してきています。

私も日々犬の散歩で朝早く起きていますが、▲時

前には徐々に明るくなってきます。

朝焼けの日によつて形を変えて、とても幻想的に感じます、皆さんもたまには早起きしてそんな情景から一日をはじめののも良いかもしれません。

今回のテーマ、一瞬この言葉を目にとると、嫌な感情と共に拒否反応が出るのではないのでしょうか。大抵において、良い意味では使われませんよね。

ですが悲しいかな、皆さんの極身近に、自身でも気付かぬ内に洗脳されているんです。

どういう事だろう??と疑問に思うかも知れませんが、ありとあらゆる場面で巧妙に操られているのです。

中にはピン!と来た方もいらつしやるでしょう。

そうなんです、TV・ネット・ロコミ・流行・噂等々、誰かの何らかの目的により誘導されているんです。

今年の流行は白です。90年代の音楽が複数カバーされています。

と言って、TVやネットでニュースになれば、夢中になって買い漁り知らずの内に踊らされているんです。心当たりはありませんか???

勿論これだけではありませんよ?

郷に入れば郷に従えとの言葉あるぐらいですから、ここでよくあるのがどんな世界にもあると思います、

「昔からそうしてるから、そうやって教えられて

来たから」って、

何の根拠も説得力もない言葉、

あー、そうなんだって、片付けて来てませんか？

気がつけばいつの間にか様々な洗脳に掛かり、気がつく事もないままに一生を過ごしているんです。さも自分が選んだ道の様に、誰かにその道を歩かされているとも気が付かずに、

今いるあなた自身の道程は、本当にあなたが望んで歩んで来た道ですか？

自信を持ってそうだと答えられますか？？

常日頃から、私自身は周りに対してこう言っています。

常に考える、何の為にそれをしているのかを、何故必要なのか、本当にすべき事なのか、誰から言われたのか、裏付けはどんなものなのか、真にすべき事は何なのかと。

全ての結果にはその過程があり、その過程の前に事前の準備があり、その準備の前には行動すべきことに対する検討がある筈です。

1番はじめに、検討している内容が何を根拠にするのか、そこが重要ですよね。

だから、常に疑問を持って全ての事象に相對する必要があるのです。

有限の時の中で、無駄に浪費してしまう事こそ、本当の無駄ですよ。

勿論、経験値にはなりますから、一概に全ての無駄が損とはなりません。が、廻り道すべき時でないときに、誤った道を選ばずに済む様に、周到にしておく事が大事です。

時には廻り道も必要だと、それも1つの考え方ですが、私はそうは思いません。

ズルして近道は以ての外ですが、最短距離で目的地に無理せず到達できるのならば、私はその道を進みます。

洗脳とは、考える事を辞めた多くの人達をコントロールする手法であり、操られる側は何も思慮せずただ操られている事すら気付かず、その日を過ごしているかの様にみえる、ある種の人達にとっては至れり尽くせりの、有象無象をうみだす現象の一つと感じています。

はつきりと、自分自身はこうなんだと主張出来る人間が増えて、より一層の発展と進化が、今後もごく一部の考える人達より与えられて行くこの世の中で、少しでもオリジナルの個性が増えて欲しいという思いと共に、自分自身を見つめ直し新たなスタート地点に立つて、多くの人がマイノリティを目指す世の中になって行くことすれば、今とは違った面白い世界になるのではないかと、そんな結論付けるお話でした。

洗脳、決して悪いとは言いませんが、オンラインワンこそ良いものですよ。

それではまた次回。

茨城県の難読地名とその由来 (25)

木村 進

妻の付く地名

上妻	【かみつま】	下妻市
下妻	【しもつま】	下妻市
中妻	【なかつま】	常総市(旧水海道市)
三妻	【みつま】	常総市(旧水海道市)
中妻	【なかつま】	北茨城市
中妻	【なかつま】	水戸市(旧内原町)
中妻	【なかつま】	城里町(旧常北町)
中妻	【なかつま】	取手市小文間
北中妻	【きたなかつま】	つくば市(旧谷田部町)
南中妻	【みなみなかつま】	つくば市(旧谷田部町)
小妻	【こづま】	常陸太田市(旧里美村)
吾妻	【あづま】	つくば市(旧桜村)
妻木	【さいき】	つくば市(旧桜村)
川妻	【かわつま】	五霞町

茨城県には驚くほど「妻」と付く地名が多い。特に最初に挙げた「上妻」から「三妻」までの4か所は鬼怒川と小貝川に挟まれた一帯に並ぶように存在している。

ここは2015年に鬼怒川の堤防決壊で大きな被害被害をもたらせた場所でもある。

「つま」という言葉をどのように解釈すれば良いのだろうか。

古語で「つま」は「妻」「夫」どちらもさす言葉として使われるし、切妻屋根などに使われる「つま」は「端」のことを表す。

また「つゝ津」は舟がつく湊(みなと)のことを

さし、古くからの地名にも多く使われている。また、人が集まる場所という意味合いもあるという。「ま」は「谷」を指す言葉や、「ゝの」などという助詞的な言葉としても使われる。ここでは単なる場所のことを呼んでいるのかもしれない。これなら湊(舟が着く)の場所なのかもしれない。

奈良時代初期に高橋虫麻呂が筑波山に登って下妻の方を見下ろしたら大きな湖に白波が立っているのが見えた。

そして「新治の 鳥羽の淡海(あふみ)も 秋風に 白波立ちぬ」と詠んだ。

この「鳥羽の淡海」は、現在の「騰波ノ江(とばのえ) 駅」のあたりにあったといわれる、かなり大きな湖沼だという。

そして下妻(しもつま、しもづま)はこの南岸にあり、湖沼に面した場所で、縄文早期から古墳時代の遺跡が多く残されており、古くから人が住んで開かれていたことが知られている。

大きな都市である下妻地名の語源については、角川の日本の地名大辞典に、いくつかの説が書かれている。

(1) 郡の下方にて詰まりの地(郡郷考)

(2) ツマは端にて、郡の下方の端の意(新編常陸)

(3) 「下ノ津」という漁場の北にある瀬上ヶ原に応徳3年(1087年)常陸大掾平清幹(吉田清幹)が城を築き、下ノ津に近いために「下津間城」と名付け、息子盛幹(なりもと・鹿島三郎)の居城としたため(常総誌略)

(4) 騰波ノ江沿岸のシモ(南部)・ツ(の)助詞・マ(港の古語)の意(下妻市史)

との考え方が書かれている。基本的には4案に近

いと感じているが、「ツ」は「の」で、「マ」が「港」というのは逆のように思う。ツ||津||湊 で マ||の のことだろう。さて、では上妻、中妻、三妻 などはどうであろう。

上妻だが、この湖沼の北側にあり、現在は住所地名としては残っていないが、小学校名などに使われている。しかし、下妻があったので後から「上妻村」という地名にしたと思われる、明治22年に近隣の12ヶ村が合併してできた村である。

また三妻村についても明治22年に三坂村と中妻村が合併したときにそれぞれの村の頭文字をとってつけられた名前である。妻が三人もいたら大変だ。

「中妻」については茨城県だけでもかなりの場所に存在する。

妻の付く地名を角川の地名辞典から内容を抜粋してみよう。

中妻(常総市・水海道)・・・江戸時代から見られる村名

中妻(北茨城市)・・・花園川の下流右岸。1595年の検地目録に記載がある

中妻(水戸市・内原町)・・・明治22年に8ヶ村が合併してできた村名だが、江戸時代に「中妻郷」が存在した。

中妻(城里町・常北町)・・・中妻三十三郷と呼ばれ、室町時代から地名は存在していた。

中妻(取手市小文間)・・・小貝川と利根川の合流点付近にあり、貝塚や縄文時代の遺跡が見つかった。

北・南中妻(つくば市・谷田部町)・・・小野川右岸の筑波台地上にある。江戸時代から北中妻村、

南中妻村としてあった。

小妻(常陸太田市・里美村)・・・里川上流の段丘上に開ける。古くから薪炭(まきずみ)を利用して鋤(スキ)先を生産していた。

吾妻(つくば市・桜村)・・・昭和52年に誕生した町名

妻木(サイキ・つくば市・桜村)・・・花室川の上流右岸に位置し、江戸期から見られる村名だが、「才木村」とも書いたという。どうも妻の漢字は後から当てたものだろう。

川妻(五霞町)・・・利根川右岸にあり、地名は川沿いにあり、西北端が三角形で、つま形をしていることによるという。鎌倉時代に「河妻郷」(下総国)が存在した。しかし洪水の多発地域で江戸期には権現堂川の決壊が17回あったという。

「妻」地名は比較的新しいものもあるが、古くからある場所のほとんどが川沿いの台地が多く、また洪水被害も多発している場所が多い。やはり「妻||つま||ぬま||沼」というような構図とも考えられそう。アイヌ語で沼のことは「ト、トー」とか「トマム」というようだが、トマムは湿地帯で、トーは湖などに使われる。

また日本語となっている「沼||ヌマ」もどうも古代に新羅国から伝わってきたようでもある。

古事記(712年)に「新羅国に一つの沼(ぬま)有り、名を阿具奴摩(アグヌマ)と謂ふ」と出てくるという。

また万葉集の歌にも「奴麻||ヌマ」が出ている。



やまと暮らし (65)

さと女

6月梅雨入りの季節です、今年は九州や関西よりも早く関東地方が梅雨入りに・・・？これも異常気象の一環ですか？？日々曇りの日が多くなり鬱陶しい？そして、2～3週間後の6月末には梅雨明け、何もかもが狂っている此の頃です・・・？

・6月は梅雨入りの時期・・・つゆ寒で、肌寒い中師匠の工房へ。先月から青竹でヒゴを作り、梅干しなどを干す大作業りに挑戦。今年の梅干しに間に合うかな・・・？今日のおみやげは今の時期に採れるタケノコ(真竹)。湯がいたのをいただき、夕飯は早速タケノコご飯・・・。柔らかく美味しくいただきました。

・葦穂の奥にある、風来里牧場へ遊びに・・・。途中の山道で、乗馬した3人のお客さんとすれ違う。久しぶりの訪問で、オーナーのEさんとも話が弾んだ。山の中にある牧場のお馬さんを眺めながら気持ちのよい時間を過ごした。

・風来里牧場での情報追加・・・。オーナーのEさんに飼われているネコさんたち(「あんこ」と「きなこ」)が、9日午後8時NHKBBS(岩合さんの茨城でネコ歩きに放送)に出演するそうです。『あんこ』と『きなこ』ふたり(二匹)とも、本当にかわいいですよ！

・夫の毎日の日課、池に仕掛けた網を引き上げる

と、30センチはあろうと思うアメリカナマズがかつていた。近くにいた人が、気をつける、背びれに毒があるから刺されると腫れるよと忠告してくれた。この池は霞ヶ浦から引いている農業用水なので時折変わった魚が入る。先日は亀さん(アメリカミシシッピー)が入っていた。だから面白いのかな？

・これは外来種で駆除対象・・・？なので、後で始末しようとしてみると消えていた。さすがこんな大きい魚は飼えません。犯人は猫？狸？アライグマ？不思議です？？？

・雨上がりの午後フラワーパークに行ってきた。バラの花満開の情報で朝からソワソワ。土曜、日曜の混雑を思うと行くのは今日しかない。雨上がりの園内は花も葉っぱもいきいきと美しくよい香りを放っていて感動の連発。雨上がりの後最高・・・。

・知人の姉、小池恵子さんが八十路を迎えての作品展(日本画)を見て来た。長年勤めた保育士を退職後、念願だった日本画を、地元画家(小林恒岳画伯)指導のもと描いた作品の数々です。見ていてところどころほっこり、ほのぼのと優しい気持ちになれる作品でした。今日は初日、小林先生の奥さまも見に来ました。そして、主人が生きていたらどんなに喜んだ事でしょうと言ってくれたそうです。1週間くらい小美玉市上玉里の照光寺の本堂に展示されています。

・暑かった週末、ブックカフェえんじゅ“のト

ークサロンに参加(木村進さんの石岡の歴史を訪ねて)。翌日は、コンコンギラリーの「6つのひきだし展」で、野口夫妻に依るオカリナコンサート鑑賞！その夜は、柿岡の奥深く「ホタルの里」で、ホタルをこよなく愛する「ボランティアみよちゃん」ガイドに依るホタル見学。そして現地で野口先生とポコアポコの皆さんでのオカリナコンサート。大勢の見学者とたくさん現れてくれたホタルさん大感激でした。盛りだくさんすぎて書ききれません・・・。

石岡地方のよもやま話

木村 進

(14) 府中経塚

今回は府中経塚(きょうづか)です。

経塚(きょうづか)というと、末法思想が平安時代後半から鎌倉時代に流行り、浄土教(浄土宗や浄土真宗)の教えが広がり、阿弥陀如来さまにすがって死んだら浄土世界に連れて行ってもらう・・・などとなりました。

末法思想は仏様(釈迦)が入滅後2000年で真の仏法が衰えてしまい、世が乱れてしまうとされていて、それが平安時代末期の1052年から始まるといわれていたのです。

このため、お寺などでは経文を金属製や陶器製の筒などに入れて土の中に埋めて、1000年先の世の中が安定するまで仏法の経典を残そうとしたのです。いわゆるタイムカプセルのようなものです。石岡にもギター文化館のすぐ前の畑のところに「経筒(石櫃付き)出土地」の看板があり、もう一か所「北谷経塚」というものが確認されてい

ます。

でも今回の話はこの経塚とは少し違い、一字一石経といわれるものです。

平べったい小石に「阿弥陀経・無量寿経・観無量寿経」の全二万六千六百字あまりを一石に一字ずつ書いて埋めるのです。

これは怨霊などで苦しむ場合に、その霊を鎮めるために行われていたものです。



この石は、このようなものです。
お経の書かれた小石がザクザク

ではここから府中経塚のお話です。

「その昔、文字の書かれた小石がザクザクと出てくる畑があり、「府中経塚」と呼ばれていました。その場所は、石岡市の小目代で、ここに親鸞聖人の伝説が残されていたのです。

その昔この近くに農家があり、その嫁さんが親鸞聖人の教えを受けて、毎晩講中に出かけていました。あまりにも続くので、その舅は嫁に男ができたものと早合点して、ついには言い争いになり、挙句の果てには、刀で嫁を袈裟がけに切りつけました。

からくも一命を取り留めましたが、その傷がもとで後に亡くなりました。

その後、不吉なことがいくつも続くようになり、ある時に嫁が信仰していた名号「南無不可思議光如来」の掛け軸を開いてみると、掛け軸は見事に袈裟がけに切れていたといいます。

それが今、本浄寺の寺宝として伝わる掛け軸「袈裟懸け名号」です。

また、江戸時代後期、春の日に巡礼がやって来て、経塚から経石を掘り出し持ち帰りました。

それを知った農夫たちも石を掘るようになり、それを領主がそれを聞き、みだりに掘ることを禁じました。

大正時代になり、街道の道路改修工事が行われ、この経塚が道路にかかることが分かり、この遺跡を新道の脇に移すこととなり、「親鸞聖人御旧蹟」と刻まれた大きな石碑が建てられました。



(高浜街道 貝地にある親鸞聖人旧跡碑)

右には「聖跡御経塚」、左には「聖徳太子尊」、中央の前には小さな石が置かれ、仏説無量寿経が記されています。

建設には、本浄寺のほか9カ寺、400名近くの信徒たちが名を連ね、大正14年2月1日の完成

だといえます。」(茨石通信「わくわく通信」2010年12月号記事より)

どこまでが真実なのかはわかりませんが、親鸞聖人は越後での流罪が解けた後、常陸国にやってきて布教に努めました。

そして稲田(笠間市)に草庵を構えて、この石岡地方にもたびたびやってきました。

稲田から板敷峠を越え、高浜から舟で鹿島神宮へよく通っていたといわれています。

さて、この話に出てくる「袈裟懸け名号」の掛け軸の話ですが、これは水戸市河和田にある(歎異抄を書いたといわれる)唯円が開いたといわれる「報仏寺」の話とそっくりです。

こちらは「血染めの御名号」と呼ばれています。

こちらの話の概略は、河和田に平次郎という男が住んでいた。大酒のみで仕事もろくにしないどうしようもない男であった。

しかし、彼の妻は信心深く夫の目を盗んでは稲田の親鸞聖人の話を聞きに出かけてたのです。

あるとき、夫の平次郎は妻がこっそりと隠し持っていた御名号を見つけ、よからぬものを持っていて、浮気しているのではないかと疑い、とうとう刀で妻の肩から切りつけて殺してしまったのです。

妻の死体を裏の竹林に埋めて、家に戻るとそこには殺したはずの妻がいました。

驚いて、遺体を埋めたはずの土を掘り返すと、そこには死体ではなく「帰命尽十方無碍光如来」と書かれた御名号が出てきました。

しかも「帰命」のところから袈裟懸けに切れ、しかも血で染まっていました。

平次郎はそれから先、心を改め、親鸞聖人の弟子

となり「唯円房」となったのです。

親鸞は長いこと常陸国で布教や経典のまとめに時間を費やしてきましたが、後を息子の善鸞に任せ、京に戻りました。

しかし、善鸞が自分の教えとは異なる考え方に染まっていったしまい、破門してしまいました。

そしてその時に、そばの弟子たちに説いて話した内容を書きまとめたのが「歎異抄」(異端の考え方を嘆く)です。この歎異抄を書いた人物が唯円(ゆいえん)だといわれています。

「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」

有名な一説ですね。私の中学の国語の先生もこの表現法が好きでした。



下士官の手記

5

燕石(えんせき)

(先月号からの続き)

大陸での日々

8 病院船

×月×日

或る時など、聯隊の主計将校が、大金を借りて来た。使い込みがばれそうになって、青くなって泣きついてきたのだった。かわりに、一筆取って貸してやった。以降、私の隊への査察などは一切行われなくなった。

いまや、階級はただの軍曹だけれど、電話一本で高級将校をあごで使える。

×月×日

階級もさらに上がり曹長となった。小隊を指揮するので、軍曹ではつり合いがとれない。すぐに特務曹長に任官した。下士官の最上位である。

×月×日

数個小隊を率いることになったので、否応なく事務作業が煩雑になる。書類をさばく兵隊を、5、6人選び、事務室を充実させる。それでも人手が足りない。

×月×日

このあたりの広大な荒野を開墾して、畑をすることにした。辺りの農民を雇い麻やコーリヤンはこのあたりの荒野を開墾して、畑を作ることにした。辺りの農民を雇い麻やコーリヤンを植える。麻は包帯にする。大麻も副産物として取れる。コーリヤンはアルコールの材料にする。

付近の野戦病院にこれらを渡す。ひきかえに医薬品を貰う。

アルコールは、酒として、隊名と一緒に取引に使う。

×月×日

連日、徹夜につぐ徹夜である。休む間もない。次々と来る次々と来る新兵の教育もしなければならぬ。そうしているうち、連日の激務がたたったのか、とうとう頭痛と発熱が再発してしまった。

×月×日

またもや高熱が出て何度も気を失った。

×月×日

師団の野戦病院にあったが、ここではとても治療できないということで、急遽、病院船での帰還ということになった。前任下士官が三人帰ってきたので、後を託することにした。

×月×日

引き継ぎもうまくいったので、帰還船に乗ることにした。

×月×日

幾日かトラックに揺られて、港に向かった。

×月×日

港には、真新しい病院船が停泊していた。辺りには多くの輸送船も泊まっていた。駆逐艦などの軍艦もたくさん停泊している。街の様相もすっかり一変していた。警備兵に代わり憲兵隊が警戒に当たっていた。

この憲兵たちと、ちょっとしたトラブルになった。

(このことはいずれ詳しく書こう。)

病院船は、ごく最近竣工したばかりだという。

進水式には地元の名士が大勢参加したそうなの。

海軍の艦艇には船先に菊の紋章がついている。

戦艦、巡洋艦、駆逐艦等。一方、油槽船やタンカーにはこれがない。だから、艦艇とは言わないのだという。乗り組みの海軍兵が、こんなことを教えてくれた。数日間トラックに揺られる間に、体力も回復した。

以前の名残の繁華街もある。その内の一軒に入る。大きな造りである。女たちが寄ってきて、しきりに酒を進める。物資の売買で、懐は豊かである。気前よくチップをはずむ。

×月×日

病院船「〇〇丸」は、できたばかりの新型でそこぶる快適だった。

傷病兵のいる部屋からは、苦痛を訴えるうめき声が聞こえたが、私は士官待遇の個室だった。何しろ、通信本部の臨時司令官という高い身分だったのだから。少しは歩けるので船内をあちこち探検した。

×月×日。

ほぼ回復したので、再び前線に戻る。部隊が今いるところは激戦地の真ただ中だ。

そうなる、留守にした部隊の事が気にかかる。院長と直談判して、退院許可を貰う。

×月×日

輸送船に乗る。鮎足の遅さにやきもきする。

×月×日。

憲兵の一隊もこの船に乗船している。

ときおり嫌な視線を送ってくるが、こちらの階級が軍曹なので、何も言わない。

こちらにしてもこんな憲兵などなんとも思わない。いざ実際の戦闘になったら、こいつら等などはひとたまりもないというのが物腰でわかるようになっていた。

でかいモーゼル銃をたすき掛けにし、下士官には不釣り合いな軍刀を下けている。奴らにしたら胡散臭いやつと思っただろう。

船員の話では、東京の憲兵隊から、応援に大陸に派遣されるのがということだ。

思った通り、こいつらには実戦の経験がない。大陸では手ひどい洗礼を受けるだろう。

大陸での日々 9 再び前線へ

×月×日。

上陸すると、部下の一個小隊が整列して待っていた。

憲兵隊の連中は将校に対するような扱いを見て、口をあぐりと明けて見送っていた。そこからは専用のジープに乗って部隊に戻る。

来た時見た光景は、更に変わっていて、一面の焼野原ばかりである。

×月×日

幾日も車に揺られる。

×月×日

二度にわたる大病を切り抜けたので、「不死身」の称号はますます高まった。

×月×日。

兵舎などもすっかり出来上がって、軒をつらねている。

くだんの中尉は左遷され、新任の少佐が司令官となっていた。出身が技術畑なので、戦闘にはうとい。着任早々呼ばれて、実務を任せるといふ。

古参兵あたりから私の評判を聞いたのだろう。

大小の戦闘も経験して、今ではいつの間にかベテランの下士官となっていた。

上級司令部にいるM大佐も、何くれとなくバツクアップしてくれる。

×月×日。

早朝から表が騒がしい。何事かと表に出てみると、護衛中隊が、便衣隊を四、五人捕まえたという。これから処刑だという。数珠つなぎになった黒衣の若者が引つ立てられていく。見たくはないのだが、立ち会わねばならない。

司令官殿はこうした場には出てこない。

一人の若者が引き出される。

「こいつは女だ。」

兵隊が素つ頓狂な声を上げる。

廻りの者からは、歓声ともうめきとも取れるどよめき声が漏れる。みんな長いこと女体には触れていない。近くの陸軍からも、手すきのものが大勢見物に来ている。

「早くやっちゃまえ。」

「かまうこたあねえ。」

周囲からヤジが飛ぶ。

「もったいねえな。」

分隊長の下士官がこちらに指示を仰ぐ。

「構え。」

陸軍の下士官が、声を上げる。

背中へ衝撃が走った。少年兵×が飛びついてきたのだ。

「隊長サン。アレハ、メイメイ。タスケル。」「……小姐……」

早口だからよくわからないがどうやら自分の姉妹だから助ける、と言っているようだ。娘の方も、少年に向かって、訴えるようなまなざしを向けている。

「伍長、この者は本官の知り合いだ。××が預からして貰う。」

陸軍兵の間から、不満の声が漏れる。夕べ遅くに寝て、今朝早くこの騒ぎで起こされたので、私はものすごく機嫌が悪かった。仕事も山積みで疲れてもいた。

「この通信隊を預かっているのは俺だ。捕虜を生かすも殺すも、貴様らを生かすも殺すも俺の胸三寸だ。文句がある奴は、一歩前へ出る！」

腰の軍用モーゼルを引き抜きカチャリと安全装置を外す。みんなは凍り付いたように静まり返る。私の軍用モーゼルは、このあたりではすっかり有名になっている。作りも通常モーゼルより少し大きい。これはあのちよつと変わった看護婦のY子のものだ。例の預かった包みの中身がこれだった。ならず者にいつか復讐するために、ひそかに手に入れ隠し持っていたのだ、という。

「もう必要なくなったから、貴方に上げます」と言って、再び大陸へ戻るとき餞別代りに呉れたの

だ。この付近の中国兵や匪賊にもうわさは伝わっているという。

一人で十数人を相手に戦い、モーゼル一丁で皆殺しにしたという話。しかもその一人は、木っ端みじんになり、跡形も残らなかったとか。

真相はこういうことだ。中国兵が死んでいる、という報告を受け、モーゼル片手に現地向かった。確かに、十数人の中国兵が折り重なって死んでいる。ふと見ると一人だけ死んだ振りをしている。後ろ向きになって、一緒に行った連中に気づ

かれないよう、早くいけと手で合図した。数えてみると、鹵獲した小銃が一丁多い。計算が合わない。逃げ去った中国兵の物だろう。

こんな話に尾ひれがついて、私は恐ろしい拳銃の名手で、遠く離れた敵兵の左目ばかり射抜くという伝説まで生まれた。本当は一度も撃ったことがない。

この場には陸軍将校もいたが、何より上陸以来生き残った歴戦の兵士である。そこらの将校よりずっと経験がある。それに師団長が随分と気に入っているらしい。いつの間にか姿を消している。

くだんの伍長も、

「司令にお預けいたします。」

とさつさといなくなってしまった。

古参兵の経験から、下手に関わるとんでもないことになる、と判断して逃げたのだ。

S・A二等兵を呼んで、詳しく聞き取りに当らせた。それによると、逃げ遅れた只の農民だという。

中国語の判らない陸軍兵の早とちりに決まっている。それが手柄を焦るあまりの暴走だ。若くは見えるが、どれも中年以上の農民だ。とても正規の兵士とは思えない。ここは敵国の真つただ中だ。恐怖心から周りにいる者すべてが敵に見える。こんなことで、無関係の多くの中国人が殺された。

「関東大震災の時は、デマが流され多くの朝鮮人が殺された。ドモリの日本人までが、誤って自警団に殺された。憲兵隊や日本軍もこれに手を貸している。」

四人はしきりに礼を言っ去って行った。残された娘は、少年兵と抱き合っ泣いている。

家族が全部死んでしまい、当てもなく逃げる途

講演会のお知らせ (入場無料)

題目：「歴史 ～今 伝えたいこと～」

講師：今泉文彦

日時：8月28日(日) 13:30～15:00

場所：石岡市まちかど情報センター

主催：石岡歴史塾Ⅱ



中、農民たちと出合い、一緒に歩き出したところを運悪く偵察隊に捕まってしまったのだという。

詳しく報告書を買いて、司令官の名前で司令部に送る。

×月×日

司令部からは、

「前線のそっちの判断に任せる」と折り返し回答が来た。面倒なことにはかかわりあいたくないのだ。

×月×日

さてこの娘をどうするか。処置に困った。このままほってはおけない。部隊は当たり前だが女人禁制だ。かといっ

てこのまま追い出せば、たちまち飢狼のような兵隊の餌食となるのは目に見えている。(まあ私もその一人だが)

S・A二等兵が助け舟を出してくれた。この頃は、野菜売りの行商のおばさんたちがくる。

それに頼んで行商の仲間入りをさせればいいという。交渉はS・A二等兵がしてくれるという。

(因みに、S・A二等兵は暗号解読の功績により、一足飛びに上等兵になっていたが、面倒なので、S・A二等兵にしておく。)

娘は、涙ながらに感謝し、いろいろ礼を言うのだがS・A二等兵がいないと、半分もわからない。愛々という名前だけは判った。すぐに行商として、部隊に出入りするようになった。他の部隊にも出向く。モーゼルの一件が伝わっているので、行商人たちには指一本手を出さない。たまにいきさつを知らない者がちよつかいを出そうものなら、廻り中から止められるか、下手をしたら張り飛ばされる。

あとからいきさつを聞かされ、命拾いをしたとふるえ上がるという事だ。

時々発作が起きて、猛烈な熱と悪寒に襲われる。どうやらマラリアらしい。一、二日で回復するのだが、その間何もできない。

×月×日

少年兵・林はかいがいしく仕えてくれる。

正規の兵隊ではないので、自由に隊内を出はいりして、あちこちの村々に行つては、物々交換で食料などを仕入れてきた。S・A兵曹がいない時は、通訳として役立った。

どこかの村の娘とねんごろになったらしい、と古参兵の一人が教えてくれた。

ベテランの兵隊の目をごまかすのは難しい。呼びつけて問い詰めた。その娘を通して、部隊の秘密が漏れないとも限らないのだ。

いつになく敵しいこちらの表情を見て、

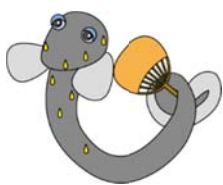
「大人、そんなことは、絶対ありません。」

「それなら此処へその娘を連れてこいよ。今の前は、日本軍の兵隊だ。」

「上官は俺だ。命令は絶対だからな。」

「明日ここに連れてこい。いやならここから出て行け。」

(続く)



【特別企画】

打田昇三の太平記(23) 巻第十・1

源頼朝は少年時代に平治の乱の敗北・源氏滅亡で平家に捕らわれたが、平清盛の継母の恩情により死罪を免れ伊豆の国に流罪となっていた。地元で監視役を命じられていたのが北条時政である。

やがて頼朝は時政の先妻の娘・政子を籠絡して其の一族を懐柔し、地方武士の不満や源氏所縁の東国武士団の平家離れに助けられて挙兵した。鎌倉幕府を開いたけれども、自分では資本金を出して居ないから儲かることばかりは無く、源氏も三代で滅びてしまった。一方で「棚から牡丹餅」どころか「倉ごと米俵」の様に権力を手にした政子の実家・北条氏も、出自が伊豆半島の小豪族に過ぎ無かったから企業基盤は脆弱で「諸国に発生した鼠の様な小勢力に喰われる」のは仕方が無い。

「武士団」などと呼べる存在では無いとしても地域ごとに住民を支配していた彼らが其れなりの勢力を伸ばす機会を得たのは京都・六波羅に陣所を構えていた幕府北条氏の景気が悪くなってきたことに便乗して都合の良い部分だけ協力し合った結果でもあろうか。現代でも「会社倒産」の情報などは迅速に伝わるから「北条政権・幕府の危機」は京都近辺の村々に限なく知れ渡る。足利尊氏が幕府の命令に従いながらも、野心を秘めて都に上った頃、京都近在の志宇知、山内、葦田、余田など山中に燻っていた半分は盗賊の様な連中が噂を聞き付け、幕府討伐を目指す足利軍に続々と集まって来たから小銭でも集まれば万札に等しくなる様に足利軍団は無名ながらも膨れ上がって二万三

千余騎の大軍勢になったのである。北条氏の治政下で長い間、埋もれていた地方の武士団などが何らかの変革に期待をしていたのであろう：

其の勢力は勝手に「官軍」と称して都に攻め寄せて来ると言う。当然ながら其の知らせは六波羅に届き、緊急事態であり幕府の危機でもあることを嫌でも承知しなければならない。攻めて来る敵は防げば良いのだが護る場所が多いから兵力が足りない。此の場は天皇・上皇を奉じて鎌倉に避難し地元の間で勢力を立て直してから敵を追討しようとしたのだが、高官だけではなく其の家族・家臣などが多いので引越し準備も容易では無い。取り敢えず、京都市内各所に広大な屋敷を構えていた天皇・皇族、重臣家族などを六波羅に集めて夜逃げの準備をさせたのである。

しかし、無駄な顔ぶれが数え切れない程居るの収容施設を探すのも大変で有り、さらに宮廷には古くから伝わる行事などが多くて、今は其れどころでは無いにも関わらず慣例に拘る馬鹿公家も居たから幕府は対応に四苦八苦していた。

其の中に「官軍が来るのは四月十五日：」と言う具体的な情報が伝わって来た。幕府側は都の周辺に展開している（であろう）防御陣を確認して見たのだが、西も南も西も敵軍優位の知らせばかりで、僅かに「僧兵軍団が護る東山道だけが有力」という情報しか得られず、其の僧兵軍団も条件次第では敵になる確率が高い。言うなれば幕府軍は「四面楚歌」の状態に置かれていたのである。

そう言うことは隠していても漏れるから京都守備の幕府軍兵士は絶望感に打ちひしがれていたけれども、監視が厳しいから逃げる手段も無くカラ元気を装うしか無い。上役たちも作戦と言える程

の智恵では無いが「街中に障害物を置いて敵の侵入を妨ぐ」「川を堰き止めて池をつくる」：と言う様な単純でお粗末な作戦しか思いつかない。

○足利高氏、願書を篠村八幡宮に籠められし事

元弘三年（一、三三三）五月七日の早朝、足利高氏は二万五千余騎の軍勢を率い、未だ夜明け前なので馬にも「静かに！」と言いつつ篠村宿を出立した。集落の南の森に、余り大きくは無いが由緒の有りそうな神社が祀られ禰宜が参詣する鈴音が聞こえたので高氏は「戦場に赴く身で有るから：」と、馬を下りて参詣することにした。

巫女らしい者が居たので「：此処は如何なる神を祭祀する社か？」と訊ねると「：都から八幡神を勧請した社と聞いており、篠村新八幡と呼ばれています：」と答えた。高氏は「さては当家（源氏系）が尊敬する霊神であり、是から出陣するに相応する守り神である：」と喜び、巫女に頼んで紙を貰い、次の様に祈願文を書き上げた。

「敬まつて白（もう）す 祈願の事

八幡大菩薩は聖代前烈の宗廟、源家中興の霊神なり、本地内證の月、十万億土の天に懸かり、垂迹外融之光は明らかに七千余座の上に冠たり。縁に触れ、化を分かつと雖も事（いつ）に未だ非禮の奠を受けず。慈を垂れ生を利すと雖も偏に正直の頭に宿らんと期し給う。偉なる哉。其の徳の為に世を擧げ誠を尽くす所以なり。

爰（ここ）に承久以来、当棘累祖之家臣、平氏末裔之邊鄙悉に四海之権柄を執りて邪（よこしま）に九代の猛威を振るう。剩え今、聖主を西海の浪に遷し貫頂を南山の雲に困らしむ。惡逆之甚、前代未聞也。是れ朝敵の最にして神敵の先なり。天

の理として誅を下さずんば臣たるの道を致さざるに似たり。高氏、彼の積悪を見て、未だ願に達せず、其の身、魚肉の薄きを以て刀俎の時に当たらずと雖も義卒力を合わせ、威を西南に張る。

上将是鳩嶺に軍し下臣は篠村に軍す。共に瑞垣之影に在りて擁護之懷に出ず。函蓋相應、誅戮何ぞ疑わん。仰ぐ所は百王鎮護之神約なり。勇を石馬之汗に懸け憑む所は累代帰依之家運也。奇を金鼠の咀むに寄す。神、將に義戦に與して靈威を耀し給え。徳風草に加えて敵を千里の外に靡かし、神光劍に代り一戦の中に勝ちを得んことを願う。丹精誠有り。玄鑒誤ること莫れ。

元弘三年五月七日 源朝臣高氏 謹白

是を朗々と読み上げてから自分が差していた鐙矢を添えて神殿に捧げたので、重臣たちも真似をして矢を奉納した。神様が合戦用の矢を貰っても始末に困るだけだが「ヤダ！」と言えない。

原文には「玉の様に美文で明白な内容なので、神様も願いを聞いて下さるであろう：」と書いてあるが、地方で穏やかに過ごして居られる神社の神様は合戦などに関わりたく無いのが本心かも知れない。しかし高氏は大満足で進軍を開始した。

一行が大江山を越える時に、山鳩が飛来して源氏軍の象徴である白旗の上を旋回したので一行は「八幡大菩薩の御守護である：」と勝手に決めて其の後を追って進んだところ、偶然にもかつて内裏が置かれていた場所に着いた。是を奇跡の瑞兆であるとして勇氣百倍、戦場を目指して進んだ。其の途中では敵となる少数勢力の武士団が五騎、十騎と降伏して来て、出発時は二万騎程であった軍勢が五万余騎の大軍勢に成長していった。

（続く）